

※ この文章は、朝日新聞 2015 年 2 月 8 日朝刊、オピニオン面「私の視点」に掲載された文章の、校正前の原文（朝日新聞社に最初に投稿したもの）です。朝日新聞社の許可を得て掲載しています。

私の視点

東洋大学准教授 越智信彰

2015 年は国連の定めた国際<sup>ひかり</sup>光年。折しも日本では、青色 LED 発明に対する 3 氏のノーベル賞受賞もあり、光や照明への注目が高まっている。日頃我々は様々な形の人工光・自然光を利用し、多大な恩恵を受けているが、人工光（照明）による「害」について考えるのも、重要なことであろう。

46 億年の長きに亘り、地球上の明るさは太陽に支配されてきた。人間を含む殆どの生物は、昼行性にせよ夜行性にせよ、24 時間の明暗のサイクルに適応した体内の仕組みや行動パターンを持つ。照明によって夜の光環境を昼間のように改変すること（それはほんの 130 余年前に始まった）は、自然界の最も根源的なルールを書きかえる行為であることを、我々は認識する必要がある。

その害は、想像以上に多方面に及ぶ。夜行性生物や昆虫の生態への影響、植物・農作物の発育への影響、人体への影響（不眠症や体内時計の乱れの誘因）、夜空の星が見えにくくなること（これは、子供たちの自然科学への関心や科学リテラシーの低下に繋がることの懸念もある）など。光害<sup>ひかりがい</sup>と呼ばれるこの問題は、人々の気付かぬうちに、地球上のあらゆる都市を急速に蝕んでいる。

もちろん照明は日常生活に不可欠だ。しかし、過剰な明るさや、目的外の方向（例えば夜空の方向）を照らす照明は、安全性の向上には何ら役立たないし、貴重なエネルギーの浪費でもある。それらの無駄な光を削減し、必要な光だけを使うことが理想だが、そう簡単な話ではない。光の使われ方は様々であり、立場により光の必要性が大きく異なるためだ。例えば多くの人々を楽しませるイルミネーションも、星を見たい人々には邪魔な光であり、誰もが必要とする防犯灯も、野生生物には有害な光となる。

今最も重要なことは、光害問題の認知・理解を高めることだ。国際光年を契機に、多くの人がこの問題を知り、考えることを期待したい。その上で、全ての人に共通する事項と、立場による違いとを分けて考える必要がある。前者は省エネ・自然環境保護・健康に影響を与えない光環境を目指すこと、と言えるだろう。後者については、光の必要性和暗さの必要性、お互いの立場を理解・尊重し、共存できる環境の構築が理想だが、実質的にはいかに暗さを保護するか、という問題だ。フランスやスロベニアには光害抑制のための法律があるが、日本でも同種の法律ができるためには、現状の光大量消費社会からの大きな意識改革が必要となる。

谷崎潤一郎は昭和初期の作『陰翳礼讃』の中で、過剰照明に対する世間の無頓着さを嘆いた。自然本来の陰影を楽しむ谷崎のような心を、現代日本の我々は思い出すことができるだろうか。